

ソード・ワールドRPG

サイランド・サガ

Siland Saga

ダイジェスト・リプレイ

『西ネイルの冒険者』

ACRAP・編
シナリオ作 今井
リプレイ著 海保

目次

目次	2
はじめに	3
物語の舞台	4
本編	6
第 1 章 ロツソの場合	6
第 2 章 ハイドンの場合	8
第 3 章 キット＝バミアンとバットとジャンドルフの場合	10
第 4 章 いい素材だ	13
第 5 章 実時間では非常に長い探索	15
第 6 章 バット(の中の人)登場	18
第 7 章 最初にして最後の戦闘	21
第 8 章 みんなバカばかりだ！	28
あとがき	30

はじめに

LOTR で味を占め、TRPGセッションの悉くをリプレイとしてまとめ、それをネットで公開する企みが進行中ですが、第2弾としてソードワールドでお届けします。ソードワールドはメンバー全員にとって、セッションを何度も行った馴染み深いルールなのでプレイそのものは手馴れたものです。

リプレイですが、いつもの事ながら長時間のプレイでリプレイも相当なものになります。これを根性で漏らさずリプレイとして残すのもアリなんですが大変なので今回はダイジェスト・リプレイという形式を取る事にしました。

だって(今回に限るが)実時間にしてメンバー全員が合流するまで3時間で何もないダンジョンの探索に3時間くらいかけてようやくと戦闘が1回ですよ。ダラダラ書いてらんないっつーの!(逆ギレ)

このダイジェスト・リプレイという形式ですが、基本的に平文で説明できるところは説明してしまいます。キャラクター紹介とか世界観とか。あと、ダラダラと迷宮を探索するところとか、実時間で2時間かけているけど、2行で済みます。文句あんなら自分で書いてみてください。笑ったところだけリプレイ形式にしてみる。

その分、図などを多くしようかなと企んではいますが、うまくいくかどうか……

まあ前回のLOTRもそうですが、実験的な試みは毎回していきたいと思いますので、適当に見守っててください。

物語の舞台

この物語の舞台はアレラスト大陸ではなく、フォーセリア西方のサイランドという国から始まる



図 1 サイランド西方 ネイル王国

マスター「さて、舞台はアレラスト大陸ではなく、その西方数千キロにあると言われる」
ハイドン「ケイオスランド？(笑)」
ロツ「埼玉県？(笑)」
キト「埼玉県か…ならよし！」
ハイドン「どこだよだから！？」
マスター「そこまで考えていないの。アレラスト大陸ではないってことで。出身もアレラスト大陸ではないの。」
ジャンドルフ「名も無き島にいるわけね。」
ロツ「まあ、下手に世界観に制約されるよりはいいかもね。」
ハイドン「じゃあ埼玉県でいいよ(笑)」
キト「私は春日部出身だ！」
ハイドン「私は久喜出身だ。」
ロツ「じゃあ俺は都会の浦和で。ちょっと待て、これ…脚注…」
ハイドン「ちゃんと入れろよ。地図つきで。久喜は利根川越えたら群馬だからな(笑)¹」

¹ お前らって本当に俺に面倒ばかり押し付ける…

マスター「で、その中の国ー」

ハイドン「サイタマランド…サイランド！という大陸の中の…浦和？(笑)」

キト「三郷？(笑)」

ハイドン「うーむ…長瀬！？(笑)あ、長瀬が寄居がいい。戦う時には便利だよ。採石場があるから爆破バンバンできるし」

キト「採石場しかないやん(笑)」

ハイドン「で、サイランドの中のガナロト、ガナロトね。王国は、どんななの？」

マスター「…まあサイランドは採用するとしてー」

ハイドン「ガナロトは採用しないのかよ！！(笑)」

マスター「君たちのいる所はネイルという王国ね。」

ハイドン「ああ、既に決まっていたのか」

ネイルは西と東に分かれている。かつて国王が若くして死んだときに分かれた。両国の国交は悪くなく、断絶はしていない。もちろん、西が自由主義とか、北が閉鎖的ということもない(笑)。

一方、両ネイルの北方にはマンゲー(群馬より命名)という地域がある。小国ながら戦の強い国であった、かつて両ネイルと戦ったが、敗北し現在は東ネイル領となっている。

アレクラスト大陸から遥か遠く離れた地で、物語は始まる…



本編

第1章 ロッソの場合

- ・ ロッソ(ハーフエルフ、シャーマン&シーフ、♂)

**NOW
PRINTING**

人間の年に直して19歳だが、記憶喪失で2年前以前の記憶が無い。トレジャーハンターとして生計を立てている。シーフ&シャーマンのハーフエルフの熱血漢。物語の主人公。え、マジで？(←プレイヤー)

顔だが、文才・企画力・構成力・脚注の調査力のある私に画力まで求めないで

(物語の舞台)リンド村

人口60人弱の小さな村。主な産業は農業と繊維業。

村の外れの森に古代カストゥール時代の物と言われている小さな遺跡がある。また村の周囲20キトマスター以内に大小いくつかの遺跡がある。これらはカストゥール時代の天文観測を行っていた所と言われている。

プレイヤーのバミアンやジャン、バットもこの村で今は暮らしている。

今回ロッソは闇鳥という名前の情報屋から宝の情報を買った。西ネイル東方のリンドという名前の小村の近辺に新しく発見されたカストゥール時代の古代遺跡があるというのだ。古代遺跡は天文観測を行っていたところと言われているが、実は未発掘の部分があるということが西ネイル考古学研究会の資料からわかった。

ロッソ「携帯でメール入ったから。ヤミガラス.com(笑)」

マスター「ただし、グズグズしていると考古学研究会自身の調査隊が発掘を始めてしまうという話がある」

ロッソ「じゃあ、リンド村に着いたよ」

マスター「早いな。途中何も用意することもなく？」

ロッソ「せっかちだから。遺跡に入ったよ(笑)」

マスター「いや、場所は知らないから」

ロッソ「場所知らないの？」

マスター「村の位置を教えてもらって、行っただけ。既に発見された遺跡に未発掘の部分があるだろうと言われただけだから」

ロッソ「未発掘の場所はしらないの？(ややこしいなあ)」

(ハイドン「情報が5ガメルだったんだよ」)

仕方ないのでロッソはリンド村にて木賃宿を借り、情報収集を行う。まずは酒場にて

酒場のマスター「いらっしやい」

ロッソ「生中(笑) 遺跡の調査に来たんだが・・・」

酒場のマスター「観光目的かい？」

ロツソ「西ネイルの考古学協会に頼まれて調査に来たんだが」

酒場のマスター「そういえばこの前もそんな奴が来たなあ。」

ロツソ「どこに行ったかはわかるか？」

酒場のマスター「いやあ、村長に聞けばわかるだろうさ」

ロツソ「わかった。(じゃあ村長のところに行くか)今何時頃？」

マスター「お昼過ぎ」

ロツソ「昼から生中飲んでたよ(笑)じゃあ村長に聞きに行くか」

しかし村長は留守であった。ロツソはどうしようもないので酒場に戻ることにする。しかし……

マスター「戻る途中、ガキ共が近づいてくる」

ガキ「お兄ちゃん、お兄ちゃん、冒険者？」

ロツソ「そうだ」

ガキ「かっこいい～！俺もね、大きくなったら冒険者になりたいんだよ。俺達もどっかに連れて行ってくれよ！」

ロツソ「子供の行く所じゃない。(ていうかどうしてこう小憎らしいんだろ？²)

ガキ「そう言うなよ！俺だって強いんだぜ！」

ロツソ「どう強いんだ？もお～～～～～！(笑)」

(キト「ウザがられてる」)

ガキ「そうだ、お兄ちゃん、冒険者ごっこしようぜ」

ロツソ「子供の遊びに付き合っているヒマはない！」

ガキ「俺達のとっておきの場所でさあ……遊びに行こうよ」

ロツソ「……ちょっと心が動いた(笑)」

(キト「お兄ちゃんお兄ちゃん、大人のとっておきの場所はどうだい？(笑)」)

(ロツソ「それもいいなあ……いくらだ？(笑)」)

ロツソ「じゃあ、しょうがない。ちょっとだけだぞ(笑)」

子供に連れられて 1 時間ほど歩き、着いた場所はストーンサークル。やはり古代遺跡であった。

² 筆者ロツソのプレイヤーだったが、リプレイ書き直しながら思ったがすっげーウザかった。でも後になるがこれバットなんだよな。

(物語の舞台)西のストーンサークル

ストーンヘンジと周囲を取り巻く石の外壁の遺跡。

こちらは村から 10km 程離れたところにあるストーンヘンジを中心に半径 500m 程の大きさの遺跡。

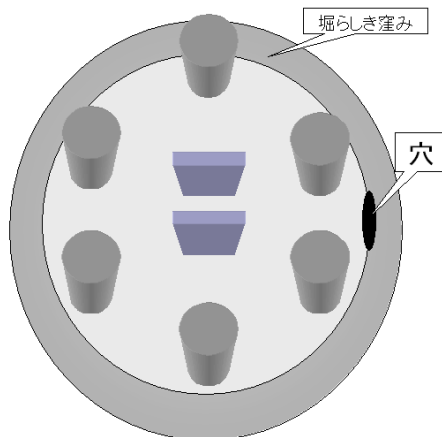


図 2 ストーンサークル

マスター「じゃちよっとここで場面を変えて。ロツソはお休み」

キット「次会った時にはひどい目にあっていたりして」

ハイドン「裸で突き刺さってるの(笑)」

キット「その 1 カットの間に何があったんだ!?(笑)」

第2章 ハイドンの場合

- ・ ハイドン(人間、ファイター&レンジャー、♂)



人間なのだが、サイコロの目による異様な器用・敏捷・知力の低さにより外見中身ともにドワーフとしか思えない。ドワーフに見えてドワーフにあらず! その正体は人間! でもドワーフと言われると怒る。

とはいえ、パーティ随一の戦士なのでいないと困る。いやはや、厄介ですな。

ハイドンは、傭兵として西ネイルの考古学研究会に雇われた。リンド村周辺の遺跡の発掘隊の護衛を行うことになった。発掘隊はリンド村東のストーンサークルで調査を既に始めている。特に何もなく、ハイドンは作業の様子を見ていた。

ハイドン「この穴の中に何かがあるか目星はついているのか？」

同僚の戦士「いや、私は何も聞いてはいないが、新たな発見があるのではないかとつばらの噂で……」

ハイドン「もっばら！」
マスター「もう一人のファイター、シルバーって名前なんだけどー」
ハイドン「ハイヨー！シルバー！³(笑)」
シルバー「おい、ハイドン、向こうから何か近づいてくるぞ。」
ハイドン「見えん(笑)」
(キト「年も年だしな」)
シルバー「子供か……？」
ハイドン「子供と大人が一人……」
(ロツソ「身長デカイよ。伸ばした」)
シルバー「ハイマン様から誰も近づけるなと言われているしな。行って注意してくれんか？」
ハイドン「わかった。ノッシノッシと近づいていこう」
マスター「じゃあ、ロツソ、ドワーフが近づいてくるよ。」
ロツソ「武器は構えていない？じゃあ、こっちもそのまま近づくよ」

こうして、ロツソとハイドンのファーストコンタクト

ハイドン「……いい天気ですな(笑)」
ロツソ「全く。布団も干せそうですな(笑)」
ハイドン「小鳥もさえずっている(笑)」
ロツソ「風が気持ちいいですよ」
ハイドン「ここへはピクニックか？」
ロツソ「……そうです。そこの石舞台でお弁当でも広げようかと。」
ハイドン「ここは今調査団が調査をしていて、危険だから、子供たちも危ないので待ってもらおうか。」
ロツソ「わかりました」

こうしてロツソと子供はこの場を去った。と見せかけてロツソは隠れて発掘の様子を伺うことにする。

シルバー「じゃあ、オレは見回ってくるからハイドンは入り口を見張っていてくれ」
ハイドン「じゃあ私は入り口にどーんと座っているよ」

そして日暮れになり、ロツソは子供を家に帰す。

マスター「一人で帰すのか？」
ロツソ「暗くなる前に帰すよ。17時になったら子供は家に帰る時間だ。」
(キト「サイタマではな(笑)」)
(ハイドン「翌朝裸の子供が……(笑)」)
ロツソ「俺が調べておいてやるから、お前は家に帰ってろ」

³ ローン・レンジャーの愛馬。ローン・レンジャーはスーパーマンと並んで、戦前からアメリカの少年の間では圧倒的な人気をばくしていた。最初はコミックブックで、そして1933年にラジオの連続放送劇として登場するや人気は頂点に達した。ロバート・リビングストン主演で、連続活劇映画として映画化もされている。



しばらく子供はぐずるが、強引に家に帰した。しかし、その後ロツソは機会を待ち続けるが調査団が立ち去る様子はない。かがり火を用意してキャンプの用意まで始めてしまった。しびれを切らして強引に潜入しようとする。しかし調査団の守りは堅い……⁴

第3章 キト＝バミアンとバットとジャンドルフの場合⁵

- ・ キト＝バミアン(エルフ、ヒーラー&シャーマン&ソーサラー&セージ、♂)

NOW
PRINTING

名前をそれぞれ反対に読むと、性格おのずと知るべし。能力値がエリートで特に敏捷度は人間では最高の 24 になる。ちなみに続けて読むとヒー！ジャーマンソーセージ。

顔は書いてくれたのだが、スキャナで読み込んだら潰れてしまった。やり直し。

- ・ バット(バットン)(人間、セージ、♀(♂))



通称がバット。ティーヴ村の好奇心旺盛な子供。一見男の子のようだが実は女の子。父親が学者の家系なせいか学問的にはかなり優秀なセージである。その反面一般知識や精神的にはまだまだオコチャマ。父親は東の大都市カベスカンの大学で学者をしている。リンド村は隠居した祖父の実家がある

ちなみにバットのプレイヤーが途中で到着したため、それまではマスターが操っている

- ・ ジャンドルフ(人間(悪党)、シーフ&プリースト(チャ・ザ)、♂)



当初はガネード(盗賊の神)信者だったが、困るのでチャ・ザになった。それ以外にはあまり個性がない。

自分にスポットライトが当たっていないときはよく喋るが、いざ自分に当たった時には普通の行動か、的外れな行動か、飛び抜けすぎて回りがついていけない行動(自爆)しかできない不器用なタイプ。

しかし潜在能力(というかダイス運)は高く、相当の戦闘力を持つ。

キト＝バミアンとジャンドルフは共にリンド村に住み、それぞれヒーラー、神官として生計を立てていた。職業柄、村の子供たちにも好かれていたが、子供が二人に事件を運ぶ……

⁴ 実時間は 30 分くらいかかっているが省略。だってこらへん動いているのロツソだけだし、進展もなくてつまらなかった。聞いてて。マスター、もうちょっと何かしろよ。

⁵ つうか時間見たらここまで 1 時間。オイコラ！ 1 時間経つのにキャラクター全員そろっていないってどーゆーことやねん。ということでリプレイではあっさり書くよ。

マスター「まあ、エルフなんで村の連中から変な奴と思われているが、ガキ共からは人気はある」

キト「君はもっと強くなれる・・・(笑)⁹そんなことを言っている」

マスター「さて、夕方暗くなってからバミアンの家に見覚えのあるガキがやってくる」

キト「なんだ、バットじゃないか(笑)バットでいいの？」

マスター「バットバット。」

バット「今日ねえ、凄い格好いい冒険者が来たんだ。格好よかったなあ。」

キト「ほお、格好いいのか。」

バット「俺も大きくなったら絶対ロツソみたいな冒険者になるんだ！」

キト「そうか、彼は強くなりそうかなあ？(笑)」

(ロツソ「お前の筋力は何倍にも強くなる・・・(笑)」)

(マスター「どっちが本性なの？トキとアミバ」)

(キト「場面によって違うんだよ」)

(ロツソ「お前トキの部分出していないじゃん(笑)」)

バット「明日マスも連れて行くんだ！」

キト「面白そうだ。私も行こう。キーン！(笑)冒険者にはヒーラーが付きものだよ」

バット「そうだ！じゃあ、ジャンも連れていこうよ！」

キト「ジャン！？」

マスター「村の神官ジャンドルフ」

ジャンドルフ「ああ、村の神官だったんだ俺。OK。」

キト「まあ、いないよりかいいか(笑)強くない奴、ファイター以外には興味ないから(笑)」

バット「そうと決まったらジャンにも話してくるよ・・・ジャン！ジャン！バンバンバン！いるかい？」

ジャン「開いてるよ」

バット「明日暇だろ？」

(ロツソ「・・・なめられてるな(笑)この30男なめられてるな」)

(キト「まあ、こんな小さい村だしなあ」)

バット「どうせ暇だろ？(笑)」

ジャンドルフ「よくわかってるなあバット。」

バット「明日さ、トマスたちと一緒に西の遺跡で冒険者ごっこやるんだ、一緒に行こうよ」

ジャンドルフ「わかったわかった」

バット「と言って嵐のように出て行った」

ジャンドルフ「扉くらい閉めていけえ！」

さて、ロツソだが(ハイドンにジャベリンを投げつける事もふくめて)3 つほど強引な手は考えたのだがシルバーも見回っており、なかなか実行に移せない。

結果、強引に潜入(ハイドンが小便をした隙を見計らって)する。しかし、ちょっと広い程度の部屋しかなく、魔法使いと身なりのよさそうな男がいて会話していた。会話を聞いたが何も収

⁹ こんな顔で、やっとキトが出たし。アミバ画像解禁でいきます。

(<http://www.fsinet.or.jp/~oraho/oraho/amiba/title.htm>)



穫がなかった(はしょってないぞ！本当に何もなかったんだから)ので強引に出ようとして見つかる⁷。

マスター「おい、何か金属音しなかったか？」「おう、聞こえた聞こえた！」
マスター「一人が、ちょっと中に入ろうとする。暗いから直接中は見えないんだけど。」
(キト「さいなら(笑)」)
(ジャンドルフ「やっぱり裸になって突き刺さるんだ」)
(キト「刺さっとけ(笑)」)
ロツソ「……じゃあ、逃げる！」
マスター「じゃあ、当然見つかるよ『なんだお前は！』」
ロツソ「森のほうに逃げるよ」
マスター「完全に気づかれたね。ハイドンの方にも『ハイドン、賊だ！』」
ハイドン「じゃあのしのし歩いていく(笑)」
マスター「敏捷度はどっちだっけ、ロツソの方が圧倒的に遠いのか。のしのし追いかけていくけどどんどん離される」
ハイドン「じゃあ、あきらめる(笑)」
シルバー「ハイドン、賊の顔は見たか？どんなやつだった？」
ハイドン「せっかちな奴だった(笑)」

ロツソは追っ手をまいたが、忍び込む機会は完全に逸してしまったことになる。ロツソはそのまま休息をする。

翌朝になり、場面は変わってキトとジャンドルフ。バットとその友達で酒場のマスターの息子トマスと合流し、ストーンサークルに到着する。ところが、調査隊がうろうろしている。

ジャンドルフ「おや？」
キト「何があったんだ？」
ジャンドルフ「何があったか知らないから、近づいていく。」
マスター「いかにも戦士みたいな人が近づいてくる」
シルバー「悪いがここは発掘中止だ！ピクニックならよそに行ってくれ。」
キト「村長の許可は取ったのかね？」
シルバー「もちろんだ！」
キト「…ならよし！(笑)」

こうして彼らは追い返されてしまった。

キト「バットよ、どうするのだ？」
バット「じゃあ、森の遺跡で冒険者ごっこしようぜえ？」
ジャンドルフ「森の遺跡？」
マスター「これ以外にも、この近くの森に小さな遺跡がある。そこは子供達の遊び場なんだけど。」
キト「しょうがない、そっちに行くか。」
ジャンドルフ「大人も一緒だしな。」
ロツソ「…じゃあ、こいつらが離れたら合流するよ。」
マスター「そしたら、バットと大人二人が隊列を組んで歩いてくるよ」

⁷ えーと、ロツソは悪くない。悪いのは情報を与えないマスターだ！

ロツソ「おい、バット」
バット「ロツソの兄ちゃん、どこ行ってたんだよ!？」
キト「君がロツソか……いい素材ではないな(笑)」
ロツソ「なんか言われたような気がするけど、よくわかってないからリアクションが取れない」
ジャンドルフ「俺は意味わかるけど」
キト「お前にも言ってるから(笑)」
マスター「で、バットの話聞くからには、追い返されたから村のはずれの、森の遺跡で冒険者ごっこしようとしていたらしい。」
バット「お兄ちゃんも来る？」
ロツソ「……私はもう少しここで様子を見る。(いや、どうしようもないか)じゃあ昼間はそっちに行くか。でも、そっちがメインだとハイドンの出る幕がなくなってちょっとかわいそうかな。」
ハイドン「ハイドンは座っているだけだから(笑)」

第4章 いい素材だ

こうして、仲間になる様子がないままに物語は進んでいく。と見せかけて実際はあまり進んでいない。バットに誘われるがままに遺跡で遊ぶことになった

ジャンドルフ「たまにはこんな日もいいな」
マスター「村はずれの遺跡は、森の中にあって石造りの 2 階建ての建物で大きさはテニスコート 2 面くらい。昔の宿舎だったのではないかとされている。隠れんぼをするにはいいが所詮子供レベルだ」
ロツソ「子供レベルね……」
バット「ロツソ兄ちゃん、何かみつかった？」
ロツソ「……何かあるかもしれないから、しらみ潰しに調べるよ」
マスター「まあ、住居跡って感じだよな。特に何も無いね、金目のものとか」
ロツソ「いや、金目の物ではなく、からくりとか」
マスター「なさげ。」
ロツソ「今まで発見されていない扉とか。」
マスター「ないねえ」
ロツソ「不自然な空間？」
マスター「不自然な空間？異空間とか……ないねえ。」
ロツソ「不自然な空気！」
マスター「誰だ屁をこいたのは!?(笑)」
(ハイドン「使い終わりのコンドームとか……(笑)」)
(ロツソ「無理やりだよお……(笑)あの人(笑)^g」)

こうしてどんなに調査しても何の異変もないまま遺跡をうろろするバット、ロツソ、ジャンドルフ、キトだが事件が起こる。トマスという子供が行方不明になってしまった。

ジャンドルフ「トーマスーッ！」
ロツソ「どうした？」
ジャンドルフ「いや、子供が一人ー」

^g 今日のハイドンは下ネタが多いぞお

バット「いなくなったんだよ！」

ジャンドルフ「大人が三人もいて……」

ロッソ「じゃあ、本格的に調べるかトマスのいた辺りでトマスの足跡を調べる……14。」

ジャンドルフ「ロッソの後ろについてる」

ロッソ「邪魔だ(笑)」

ジャンドルフ「喋ってないやん。」

キト「じゃあ、セージ⁹技能で……怪物判定！近くに怪物なんかいない！（笑）」

ジャンドルフ「セージだったら占星術で占えば？」

キト「死兆星が見える！（笑）¹⁰」

マスター「さてロッソ、トマスのいなくなったあたりに不自然に崩れている建物の部分を見つける」

ロッソ「それは最近？キト、ちょっと来てくれ、こいつをどう思う？」

キト「どう思うって言われてもなあ……11……不自然だ！（笑）」

ロッソ「まさか、瓦礫の下にと思って瓦礫をどかしてみよう」

マスター「じゃあ、細かい岩とどけると、空気の流れを感じる」

ロッソ「空気の流れを感じる」

ジャンドルフ「空気の流れを感じる」

キト「空気の流れを感じる！（笑）」

マスター「穴があるんじゃないか？という感じ」

ロッソ「じゃあ、その穴を調べてみるか？」

マスター「かなり大きい岩が塞いでいてそれをどかさないと調べることはできないよ」

こうして、村人総出で岩をどかさそうとする。トマスの父親である酒場の親父も参加し、**キトの素材力自慢**の村人達がやってきた。しかし、それでも岩は動かない。

ロッソ「もう一度トマスの足跡追跡を行おう、本当にここに入ったのか？レンジャーは？」

(ハイドン「俺が持ってる(笑)でも、どうしようもないんだけどさ。傭兵で護衛になっちゃったから」)

(ロッソ「じゃあ小便をしに、ここまで来たことにすれば？(笑)」)

ハイドン「じゃあ、ジョボジョボ音がする(笑)」

マスター「(わかったわかった)じゃあハイドンは、協会から送られてきた荷物が村に届いたというのでそれを取りに行くことになった。酒場の親父が預かっているらしいんだけど、親父は血相を変えている」

ハイドン「うむ。親父、親父い！！」

親父「なんだ、この忙しいときに。」

ハイドン「荷物が届いているだろ？」

親父「荷物ならカウンターのところに入れてあるよ。」

⁹ キャラクターが持っている技能のうち、学問にあたる技能。これが高いと賢者になる。が、ドラクエと違って魔法とは全く関係がないため、戦闘にはクソの役にも立たない。

¹⁰ 死兆星。死の運命を背負った者には、北斗七星の脇に「死兆星」が見えるようになるという設定がある。なおこの星は実際にある星(アルコル)で、アマチュア天文学の方面では二重星の好例としてよく取り上げられる星である(北斗七星の項目を参照)人によって見えたり見えなかったりする(視力が悪いと一つの星にしか見えな)ため、「見えると死ぬ」「見えないと死ぬ」といった伝説が各地にあり、それを基にしたと思われる。

(『Wikipedia』)

ハイドン「しょうがないな、じゃあ荷物を持っていくよ」
(キト「終わっちゃったよ(笑)」)

というわけにもいかないの、荷物を取るついでに(屈強に見える)ハイドンが結果的に合流して手伝うことになった。

マスター「ということで、ロツソが見たことのあるドワーフがやってきたよ」
ハイドン「ここか、子供が閉じ込められたのは？」
ロツソ「そうだ、早くどかしてくれ。」
キト「ちょよいのちょいでどかしてくれ！で、お前を見るとすごい素材だということに気がつくよ！(笑)ん？君はドワーフではないんだね？」
ハイドン「何！？わかるのか！？(笑)」
キト「君にはドワーフの精霊力が感じられないよ」
ハイドン「中々の慧眼！こやつ！(笑)ただものではないな。エルフにしてこの筋肉、この眉毛！と思っている」
キト「君は人間として凄い素材だよ！いや、逸材だ！」
ハイドン「そんな事言う奴は初めてだ！(笑)」
ロツソ「(マスターに比べて)話が早いな」

第5章 実時間では非常に長い探索

ハイドンの力もあり、岩が動き出し、そのまま斜面を転がっていった。さすがドワーフとハイドンは賛美される。が、ハイドンはドワーフではなく人間だし、ドワーフと言われると怒る。

岩の後ろには下へ向かう穴が続いているが大人が通れるものではない。

(ロツソ「じゃあ、岩をどかした意味ないじゃないか！」)

バットがロープを結びつけて調べに穴へ入っていった、が、マスターがプレイヤーに恨みでもあるかのように状況は進展しない、穴はかなり深くロープも尽きてしまった。また、ハイドンがトマスの足跡を調べたがこれもまた進展しない。

というか、リプレイ書きながら思ったのだが、この後どうなるんだっけ？

穴は途中までしか探索できなかったが、(キトを中心とする)測量によって穴の先の位置を測定し、掘り続けることによって、結局岩にぶち当たってしまい、何の意味もなかった。

というか、リプレイ書きながら思ったのだが(略)

そして、更にもう一度トマスがいなくなった状況をメンバーで再確認してみた。しかし何も聞こ

”「あれはいい木偶になる・・・」



えなかったようだ、全く。

というか、(略)

そこで……ハイドンが

ハイドン「もしかするとハイマン達の発掘している遺跡から抜け道があるかもしれない。そっちに行ってみないか？」
キト「なんて建設的な意見だ！お前、頭も切れるな(笑)」
ハイドン「まあな。私からハイマンさんに頼んでみよう」
ジャンドルフ「この際、それしか手はなさそうだし。」
キト「見たところ、あの調査隊にはシーフもいないみたいだな。」
ロッソ「でも、俺は顔が割れてるしな。何かありそうだったら呼んでくれ」
ハイドン「じゃあ、もう一人のシーフ(ジャンドルフ)を連れていくか。」
マスター「じゃあ、荷物は既に持ってるしね。」
シルバー「おお、ハイドン遅かったな。何をしていたんだ？」
ハイドン「ちょっと訳がありまして。と言いつつ中に入っていくよ。シルバーをほっといて。」
キト「じゃあ俺もシルバーをほっといて中に入っていくよ」
シルバー「おい、お前はダメだ！」
キト「触るな！(笑)」
ハイドン「ハイマンさん、ハイマンさん」
ハイマン「おおハイドン、遅かったが何かあったのか？」
ハイドン「村に行ったところ、子供が行方不明になってしまったようで、探索の手伝いをしていました。」
ハイマン「子供？そんなの放っておけ、我々には時間が無いんだ」
ハイドン「わかっております。しかしです。子供が行方不明になったのは、この東の遺跡なのです」
マスター「ピクーン！(笑)どう思う？ホセ？」
ホセ「私もクサイと思いますな。」

ハイドンの説得により、ハイマンの舞台に合流し、穴を広げて大人が通れるようにすることにした。ちなみに、現在の遺跡には何も見つからなかったので翌朝より東側の廃墟を発掘することになった。その晩……

ハイドン「分け前について話をしようじゃないか。この中にもし宝があった場合……」
ジャンドルフ「村の物」
キト「俺はあまり興味がないなあ……」
ロッソ「まあ、気にすることはない。勝手に持ってくさ。逆に下手に先に分け前の話をハイマンとしてしまって、警戒されてしまうだろ？¹²」
ハイドン「もうされているけどな。お前も無理やり入ろうとしたし。」
ロッソ「まあその節はどうも(笑)今は子供を救うのが先だ」
ハイドン「うむ」

¹² ちなみに、シーフ技能には変装があるので、村の者に混じって合流していたことにする。「オレオレオレ」とかそんな感じ。

ロツソ「あと、俺の宝」

ハイドン「え！？」

ロツソ「いやいやいやいやいや(笑)」

そして一行は就寝する事にしたが、キトは森を搜索する。その時…

マスター「じゃあキト、森から帰ってくると、人影を見る」

キト「俺は隠れることもできないから、遠くからぼーっと見ていよう」

マスター「誰かはわからないけど…」

キト「えっと、レベル1のシャーマンの魔法は…『ウインドボイス』！¹³」

マスター「声は発していないよ。息遣いだけ」

マスター「はあ、はあ、はあ…」

(ロツソ「うっ！(笑)」)

マスター「しゃがみこんでいるけど、その空間にかけるね？」

(ロツソ「空間にかけるのね(笑)¹⁴」)

(ハイドン「ああ、そっちね。わかったわかった(笑)」)

マスター「言葉は発さないから誰かはわからないけど、何かをしているようだ。」

キト「何もできない俺…ごそごそやって終わり？」

マスター「うん、しばらくするとまた立ち上がって、どこかへ行った。」

キト「ハイドン、起こそうかな…」

ハイドン「うんが！(笑)」

キト「これこれ、こういう事があって…」

ということでこの不審な人物が何をしていたかを探ることになる

ハイドン「しゃがみこんでいた地面を探ってみようぜ」

マスター「その地面は昼間大きな石が出てきたところに近くだね。」

ロツソ「調べてみるかとりあえず…14。ここかなあ～？」

キト「間違ったかなあ～？(笑)¹⁵まあ俺はピンゾロだったから間違えてるけどね(笑)¹⁶」

マスター「特に不自然なところはないが…」

ロツソ「(14なのに)何も無いの？何かを埋めた様子はないの？」

マスター「ない」

ロツソ「立小便した後もないの！？ウンコをした様子もないの！？」

マスター「ない！」

キト「しゃがんでね」

¹³ 風の精霊の力を借りて、30メートルまでの先の音を聞く魔法

¹⁴ わからない人にはわからないと思うけど下ネタです。

¹⁵ こんな感じ…



¹⁶ ソードワールドでは何かをした時に成功判定としてサイコロを2個ふる。これには所持している技能やレベルによってボーナスがつく。

ロツソ「オ○ニーした様子もないの！？(笑)」
マスター「ないよ！」
ハイドン「…無理(笑)」
キット「そりゃ無理だろ」
ハイドン「そこまで言うなら青カンくらいでしょ？」
ロツソ「一人だったしな。」
ハイドン「あ、そうか。」

結局、マスターが謎の人物が何をしたいかもわからないまま。しゃがんで何もしていないかもしれない人が(キャンプに)戻ってきていないかもしれないよ(ロツソ)ということで…翌日になる。

第6章 バット (の中の人) 登場

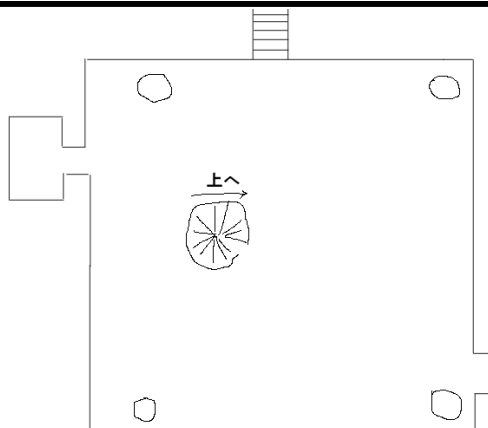
そして翌日になり、例の穴を道具によって拡張し、しばらくすると一人が通れるくらいの穴が開けられた。この中にトマスがいると思われるが、そんな事おかまいなしに、ハイマン率いる発掘隊は作業を完遂した。

マスター「部屋の上部に穴を開けたと思われるので上り下りにはロープが必要だと思われるが、降りた先はかなり空間があるね」
ハイマン「よし、我々はこの中に調査に入って行こう。お前らは待っている。」
ロツソ「もう入ってるよ？」
キット「いやいやいや、何を言ってるんだ？」
ハイドン「危険です！我々はあなた方に死なれたら報酬がもらえなくなる」
ハイマン「前金を渡しているだろうが」
ハイドン「残り半金ももらうためです」
ロツソ「まあまあ、もう俺ら入っちゃってるからさ」
ハイドン「我々はトマスを助けなければいけないからな！お前達が人命救助をしないのだから、我々がするしかないだろう！」
ハイマン「……わかった。ただし、我々の邪魔だけはくれぐれもするなよ！」
ロツソ「それはこっちの台詞だ！」
ハイドン「なんか俺すっかりこっち側の人になっちゃってるよ(笑)」

ということで、遺跡の探索が開始される。ハイマンをリーダーとしてPC達は着いて行く事になった。

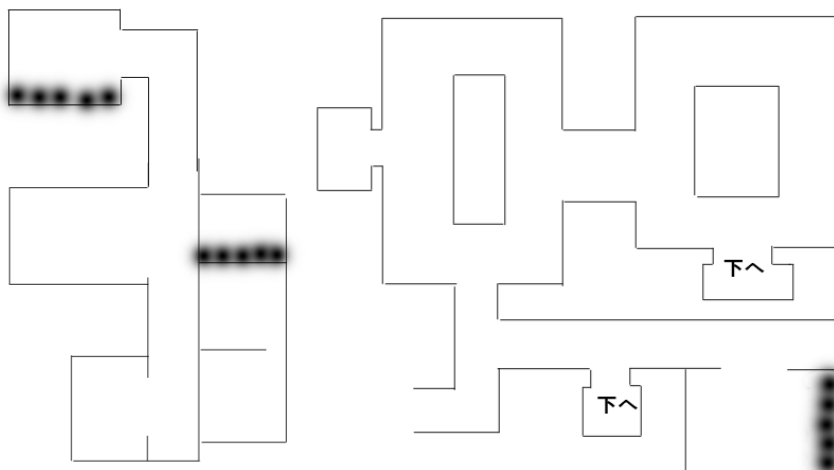
遺跡の部屋に到着し、トマスの行方を検索すると、部屋の中心部の埃が待った形跡があり、トマスがここに来た事は間違いなく、格子の方に向かっている。格子は扉になっていて、最近開けた形跡もあった。

そして、ハイドン・ロツソを先頭として先に進む。すると、広い空間に現れた。ということで最初の部屋。4隅に柱があり、真ん中に螺旋階段、北側に階段、そして西側に小部屋と、東側に通路がある。この部屋は床が湿っており、トマスの足跡を見失ってしまった。



とにかくこの広い大広間をハイマン達とPCは二手に分かれて部屋の壁沿いに歩き、探索を行う。

その後、PC達は中央の螺旋階段を上る。しかし、この螺旋階段はずれ。結論から言うと体育館のバルコニー(2階部分に設けられた通路)のようになっている。ちなみにそれだけ、ハイドンが軽い下ネタを言ったくらいしか特筆すべき事柄は無い。



(しかしリプレイ書くのが面倒でダンジョンの構造に関する説明を端折っている部分があるが、この構造が今後何かに影響することもないし、怪物や宝箱もなかったので気にしないで良い。広いだけの遺跡をPC達とハイマンが探索している、とだけ覚えていてくれればよい)

そして、後半戦。意外な人物が参入。

マスター「さてロツソ、君は後ろに気配を感じた？」

ロツソ「何？ヤマト、いやトマスかも」

マスター「なんと、振り向いてみると、バットがついてきている。バットは冒険者に憧れてついてきている。」

バット「憧れているわけね、師匠！」

ロツソ「えーっ…と、バット？(笑)ダメじゃないか、こんな所に来ては」

バット「だって…」

ハイドン「トマスを助けに来たんだよな！」

バット「うん！」

ハイドン「ここまで来てしまったらしょうがないだろう」

ジャンドルフ「帰り道もわからないしな」
ロツソ「わかった。おとなしくしてろよ。」

そのバットは途中から合流したプレイヤーが使っている。セージ技能が高いため、結果的に冒険者に憧れていながらもPCの誰よりも冒険者レベルが高いという矛盾を持っている。ちなみに、バットはここまで少年であるかのように描写していたが実は少女だった。

マスター「とりあえず、部屋は縦穴が5つあるよ」
バット「縦穴ということはここから落ちればいいわけですね」
ハイドン「なかなか攻撃的だな。いいぞ(笑)」
ロツソ「縦穴が5つ……(バットが合流したので)人数も5人……(笑)」
キット「5人が並んでいくって感じかな」
バット「師匠！それよりもいいアイデアがあります。そこにいい人(ジャンドルフ)がいるじゃないですか、いい人にロープを繋いで落としていけば」
ジャンドルフ「？」
ロツソ「シーフ持ってんだろ？」
ジャンドルフ「シャーマン持ってるでしょ？あなた」
ハイドン「プリースト持ってるでしょ。お前は幸運に護られている！¹⁷」
ジャンドルフ「しょうがないなあ……じゃあどこにいけばいい？真ん中かな！」
ロツソ「じゃあ、ハイドン、ロープを持っていてくれ。」
ハイドン「うむ」
ロツソ「離すなよ」
ハイドン「も、もちろん。¹⁸」
ジャンドルフ「誰かライト¹⁹を使ってくれ、明かりが欲しい、真っ暗なんだ。」
キット「……『ライト』(笑)」
ハイドン「不満げだな(笑)」
マスター「じゃあ明かりがとまったよ、降りていくと、下から風が流れ込んでくるが……これじゃロープ(の長さ)が足りないねえ」
ロツソ「じゃあ追加するよ。」
ハイドン「軽く結ぶよ(笑)」

などとジャンドルフをいじめて遊んでみたが、特に何かあったわけではない。そして……ついにトマスを発見する

マスター「近くで物音が聞こえた」
ロツソ「みんな気をつけろ、何かがいる」
ハイドン「俺だよ、ごめん。我慢できずに……(笑)」
ロツソ「我慢しろよ……」
ハイドン「こいちゃった(笑)」
ロツソ「こくなよ！(笑)匂うだろ」

¹⁷ 僧侶。聖職者としての技能、ちなみにジャンドルフの信奉している神は商業の神チャ・ザであり、一日一回幸運が起こる

¹⁸ ダチョウ倶楽部参照。「離すなよ」って言われたら離すよね。それがロツソの意図だったけど、イマイチ伝わらなかった。

¹⁹ 明かりの魔法。

そして、PC達はある部屋の瓦礫の中にトマスを見つけた。キトが応急処置を行い、トマスは回復した

キト「んん～、ここかな？(笑)²⁰」

しかし、サイコロの目は成功。無事に応急処置を行うことができた。

キト「何があったんだ一体？」

トマス「うわーん、突然目の前が真っ暗になって、よくわかんないけど迷子になっちゃったよ、怖かったよー²¹」

ハイドン「よし、早く帰ろう」

トマスに何があったのか、PC達は興味を無くしてしまったが、無事トマスを救出し、遺跡から脱出した。これで話は無事終了かと思われたが……

第7章 最初にして最後の戦闘

トマスは光る何か、(ドラえもん、ロボピッチャなど不明)に誘われるように遺跡の奥に入っていたらしい……

トマスは救出したが、遺跡の搜索を続けても何も発見できなかった。が、キトの『センスマジック』によって感知した魔力を辿っていくと謎のプレートを発見した。そして、このプレートを狙っていたと思われるハイマン達がトマスの家(酒場)で現れて……

ロツ「とりあえずごまかそう」

キト「トマスの怪我の様子が気になっていたんだ」

ハイマン「何か持っていなかったか？隠すためにならんぞ！」

ハイドン「心に傷を持っていた(笑)」

ロツ「そっとしてやれ、あんな目にあつたんだ」

ハイマン「あらためさせてもらうぞ、お前ら行ってこい！」

マスター「と、シルバーが中に入っていた」

ハイドン「手荒な事はするなよ！と俺も入っていくよ」

マスター「それはロッドでも引っ掛けて止められたよ」

シルバーはトマスに多少手荒な事をしたが、何もなかった。そして、ホセ(ハイマン配下の魔術師)が『センスマジック』を……

ロツ「すばやく手を押さえるよ」

マスター「それは反抗するという事ね？」

²⁰ 間違わなかった。よかったね



²¹ キモい

ロツソ「お前らだって出会っていきなりポケットまさぐられるのはいい気持ちしないだろ！それと同じ事だよ！決して俺達が魔法の品物を何かもっているわけじゃねえんだよ！！(笑)」

この後、ごちゃごちゃしている内に PC 達は明らかにハイマン達への敵対姿勢となる。ロツソは『センスマジック』の前にホセの視界から逃れようとするが…

キト「強引だなあ、もういいよ唱えちゃって。もう転んじゃたあとか(笑)」

ロツソ「ばれたか！」

ハイドン「ばれちゃあしょうがねえなあ！」

バット「見られたからにはしょうがねえ(笑)」

ロツソ「俺もジャベリンを構えるか。」

ジャンドルフ「バットを背中に庇いながらジリジリと後退していくよ」

バット「父の仇！って剣を抜く(笑)」

ハイドン「ハイマン達の反応は？」

ハイマン「やはり、お前達が持っていたのか！」

ロツソ「ワタシ、モテナイヨ、ナニモ」

ハイマン「そいつをよこせ！」

ロツソ「断る」

ハイドン「それが何なのかを教えてください、それだけの対価を払ってくれるなら渡さないことはないが」

ジャンドルフ「そうだね。」

ロツソ「20000 ガメル²²くらい」

ハイマン「20000 ガメルでいいのか？」

ハイドン「一人な。(笑)」

ジャンドルフ「それが何なのかを教えてくださいたら、こっちも対応しやすいんだけど」

ハイマン「やかましい！お前らが知る必要はない！渡さないのなら死んでもらおう！」

ハイドン「そういつてくれるならこっちも対応しやすい。」

ロツソ「ならばこちらも腕づくで聞き出すまでだ」

バット「出てこい！村の人たち！！(笑)」

キト「出会え、出会え————！(笑)²³」

かくして、戦闘モードに突入する双方。敵はハイマン、ホセ、シルバー。酒場の前にて勝負する事になった。ちなみに多くの一般市民に囲まれている。

ロツソ「俺、一般市民の中に紛れているからね。さっき逃げたし。ここから攻撃するの」

ハイドン「これが野伏の戦い方！²⁴(笑)」

そして、最初のラウンドは PC 側に不意打ちの機会が与えられ、一斉に攻撃する事になった。キトは精神力も減っているので行動を遅らせて待機する。ロツソはホセに『スネア』を唱えるが、あっさり抵抗されてしまう。ジャンドルフはハイマンにヘビーメイスで攻撃を仕掛ける。命中するが必殺のヘビーメイスながらも大してダメージは与えられなかった。

²² ガメルは貨幣の単位です。この世界の。でもよく考えたらフォーセリアと違うのに貨幣単位だけは同じなんですな。てことは度量衡を統一した偉大なる皇帝がいたんだな、と思ったら古代の魔法王国だね。

²³ こころへんの一連の流れ、明らかに PC 側が悪人ですな。

²⁴ LOTR 第 2 部を参照

ハイドン「ハイマン防具は？」
 マスター「ソフトレザーだけど、なんか歯応えがない」
 ロッソ「手応えだろ？(笑)」

バットは1ゾロにより攻撃失敗。また、ハイドンもホセへの攻撃は外れてしまう。
 (図 3 不意打ちラウンド)

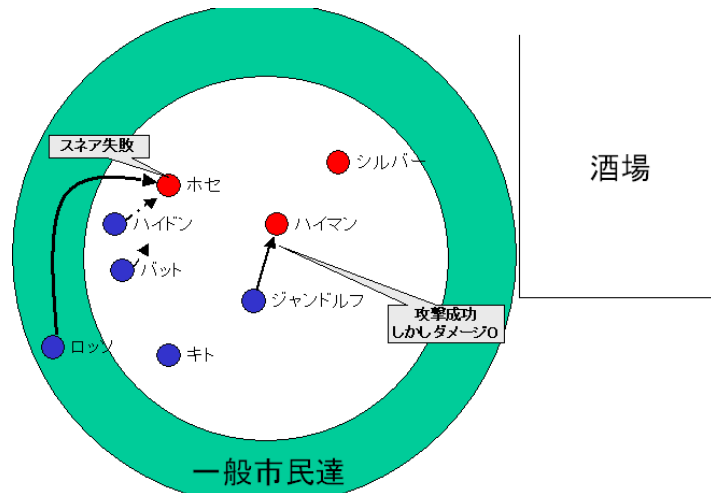


図 3 不意打ちラウンド

次のラウンドはキトは待機をし、ロッソは再び『スネア』²⁵をホセに唱える。しかしまたしても抵抗される。ジェンドルフは『トランスファーメンタルパワー』でキトに精神点を6点移す。また、バットは先ほどの攻撃が失敗して転倒してしまったので起き上がる。そして…

ハイマン「きかねえなあ」
 マスター「と、ハイマンの体が大きくなっていく！」
 ジェンドルフ「は？こいつ、人間じゃないの？」
 ロッソ「まさか、こいつ木偶(デク)？キトお前なんかやったの？」
 キト「……うーん……間違えたらしい(笑)」
 ハイマン「カー——、カッカカッカ²⁶…変身中」
 ハイドン「あ…ああ・あああ・ああああ」
 ロッソ「あ・あああああ・あああー俺やっとこれができたよ。今までマスターだったから(笑)
²⁷」

²⁵ 大地の精霊に働きかけ、目標を転倒させる魔法。パンチラが可能という点で「ソードワールドで実際に使えたらいいな魔法ベストオブザイヤー」に輝いたかどうかは知らない。

²⁶ アシュラマンの笑い声



²⁷ おなじみ。何故か知らないが最近これ定番になりつつあるなあ…

バット「よし、じゃあ起き上がりながらセージチェックを行う。何物かを調べる。」

バットは改心のサイコロの目(16)だったが・・・

マスター「ライカンスロープ²⁸のような見てくれだけど、何物かはわからない」

キトはハイドンの斧に『エンチャントウェポン』²⁹を唱えて強化し、そのままハイドンが攻撃を行う。変身中のホセに対して見事に命中し、大ダメージを与えた。
(図 4 最初のラウンドは変身中です)

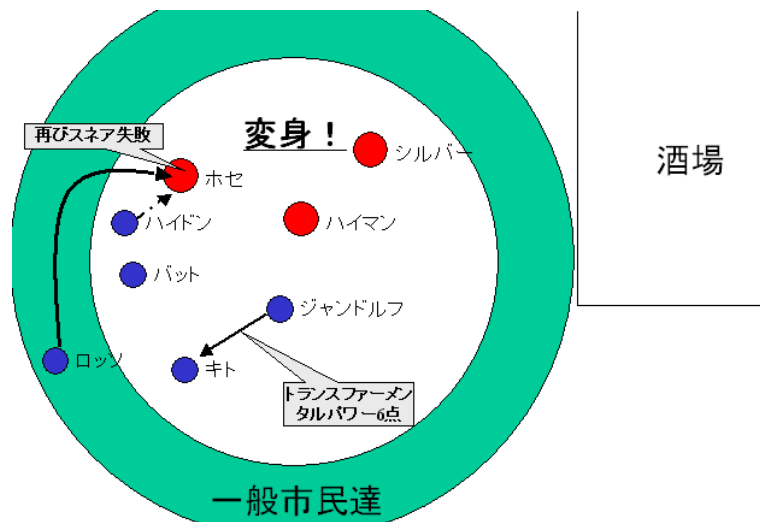


図 4 最初のラウンドは変身中です

次のラウンド。キットは例によって行動を遅らせるが、ロツソは「チャージ」を行う。ジャベリンを構え、ホセに対して突撃を行う。ジャベリンが短槍のため助走2マスターで突撃を行う事ができる。

ロツソ「ホセにチャ—————ジッ！」

ジャンドルフは続けてヘビーメイスをハイマンに対して振り回すが回避されてしまう。

ジャンドルフ「でも、変身中だったんでしょ？」



²⁸ 狼男など獣に変身するモンスターの総称。獣に変身するという特徴の他に銀か魔法の武器でないとダメージを与えられないという特徴がある。また、この世界ではライカンスロープは病気であり、ライカンスロープに傷つけられると意思とは関係なく狼など獣になってしまう「ライカンスロープ病」にかかる。『ハリー・ポッター』にも出てきているね。良く考えたら。ちなみに、今回は結局ライカンスロープでなかったのに関係ない。

²⁹ 武器に魔法力を与えて強化する。切れ味、破壊力が増すという他に敵がライカンスロープであった場合には通常の武器でもダメージが与えられるようになる。低レベルの冒険者は魔法の武器など持っていないため対ライカンスロープに必須の処置となる。

マスター「もう変身は終わってるよ。挿絵を入れてくれるんだったらもう1ラウンド延ばしてもいいよ」

ロツ「そうか、ハイドン³⁰。俺らのために泣いてくれ」

ハイドン「え？やだよ(笑)」

挿絵のないまま戦闘は続く・・・変身が完了したハイマンはジャンドルフに対して反撃を行うが、外れてしまった。ちなみに、これでハイマン-ジャンドルフ交戦ラインが成立し、以後しばらく続くことになる。

マスター「変身したハイマンの素手攻撃を回避した。」

キト「どうやったらあんな木偶(デク)ができるのか・・・それだけが気になる(笑)」

続いて、ホセはハイドンに攻撃し、シルバーはバットに接近して終了。バットは非常に危険なので人込みに隠れようとするが・・・ハイマン達の変身によって人込みは気がついたら無くなってしまっている。慌ててバットは酒場の中に逃げていった。

バット「酒場に逃げ込むよ。スルリと抜けて」

ただし、次のラウンドでシルバーに攻撃される事になるが、そこは防御行動を行う。そしてハイドンは一撃でホセを葬る。

マスター「ホセは倒れたね」

ハイドン「倒れた！？これが俺の素材だあ！！(笑)」

マスター「もう動かない。ピクピクっている」

ロツ「・・・俺は誰にチャージ？(笑)」

結局チャージは攻撃判定にペナルティをつけた上でシルバーに行ったがはずれ。キトはこの行動に対し『エンチャントウェポン』で支援してこのラウンドは終了(図 5 いろいろと動いた)

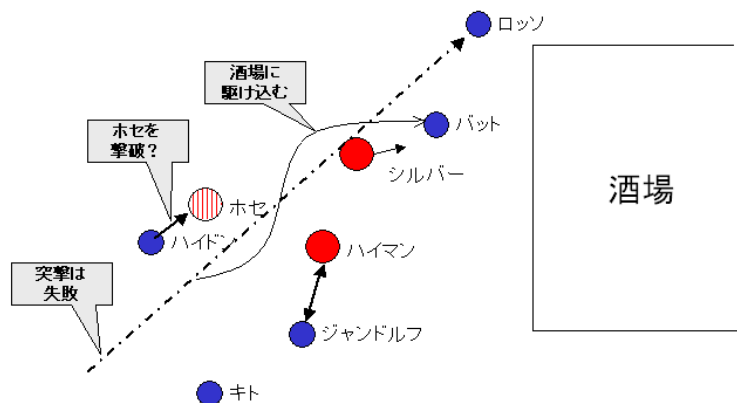


図 5 いろいろと動いた

次のラウンド。キトは待機相変わらずジャンドルフとハイマンは交戦中(互いに

³⁰ とりあえずこのメンバーの中で一番絵がうまいのはハイドンの中の人。であるが、バットの中的人是ちゃんと絵の勉強をしている、マンガ系ハイドンの中の人、リアル系バットの中の人、となるが最近どっちも全く書きちゃくれねーや。

攻撃を外す³¹)。シルバーはバットに対して威嚇を行う。

マスター「ちょっとビビって、小便漏らしそうになったけど耐えた」

しかし戦況は変わらず…(図 6 戦況変わらず)

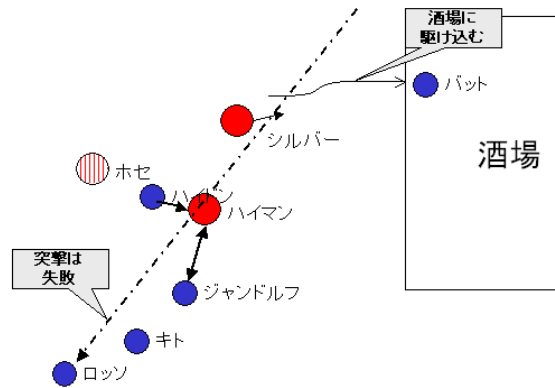


図 6 戦況変わらず

次のラウンドに入り、相変わらずロッソは往復中³²。ジャンドルフはハイマンと殴り合ってるのか演舞しあってるのか不明な状態。ハイマンはシルバーの攻撃に耐え、無傷に抑える

ハイマン「ふうん！！これが俺の素材だあ！！(笑)」

キット「惚れ惚れするような素材だ！あれはいい木偶になる…³³」

酒場に逃げ込んだバットは

マスター「おじさんに協力してもらって(シルバーに)ウオッカを投げつける」

ハイマン「俺にも飛び散るんだけど」

ロッソ「そうしたらおもむろに『ティンダー』³⁴か。」

戦闘は相変わらず続く。キットはこのバットの行動に応じて密かに酒場へ向かう。

³¹ マスターは攻撃の時は目が悪く、回避の時は高い

³² チャージによる突撃を繰り返しているということ。当たれば必殺なのだが当たらない。ちなみに今回の戦闘でロッソは軽く400メートルは走ったことになる。



³³

³⁴ 着火の魔法。対象に火をつけることができるが、マッチ程度の火のため、基本的にダメージとしての火傷は与えられない。しかし、今回のように対象が可燃性の液体に浸っているような場合は引火してダメージを与える事が出来る。ここでは可燃性の液体としてバットはウオッカを選んだ。多くはアルコール分が高いので火がつくだろうと思うけど、実際にはウオッカだからって何でも火がつくわけじゃないんだよ。

ロツソはまたしてもチャージを外し、結果往復を繰り返すことになる。などと騒いでいると・・・

マスター「ホセが立ち上がった。」

ハイドン「簡単すぎると思ったんだよなあ・・・アンデッドの反応は感じるのか？」

ジャンドルフ「いや、感じない。恐らく超回復とかじゃないかな？」

ロツソ「ライカンスロープみたいなもの、だからな」

こうして、戦線には大した変化もないままに戦闘は続く・・・(図 7 復活)

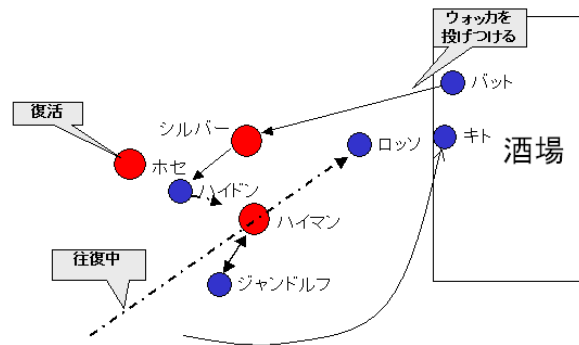


図 7 復活

キトは酒場にあったランタンを持ってくる。(次のターンで『ファイアボルト』³⁵を放つつもりである)ハイマンとジャンドルフ、シルバーとハイドンはそれぞれ交戦するが変化なし(ハイドンの攻撃は命中するが、ダメージ判定でピンゾロを出してしまい、無効となる)。バットはウォッカを投げ続ける。シルバーには命中せずウォッカがあたりの地面に散乱する事になる。ホセは酒場に向かう。ロツソは相変わらず外す(図 8 頑張っているんだがなあ)

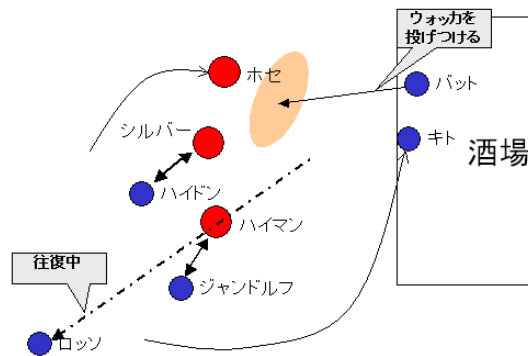


図 8 頑張っているんだがなあ

しばらくこのような感じで死闘は繰り返される。が、なぜか回避・防御に成功はするが攻撃には全く成功しない状況が、PC・マスター共に続く。バット・キト方面もウォッカをばらまいて着

³⁵ 火の精霊の力を借りて、近くの火から対象に炎の矢を発する魔法。精霊使いの基本的な攻撃呪文である。が、術者の手から放たれているわけではないので、絵としてはイマイチなのが精霊魔法全般的に痛いところ。

火をし、更には厨房からコショウを取り出し、投げつけてまでをしてホセの足を止める。かと言ってホセを倒せるわけでもない。

このような感じでしばらく乳繰り合いを続けるが、そのまま2ラウンド程続き、遂にはジャンドルフがハイマンを(シーフ1レベル程度の力量でありながら、結果的にタイマンで)仕留め、ロツソの往復はシルバー(を仕留めること)によって止まった。

そして次のラウンド、ハイマンに対して駄目押しの着火を行う。これによって戦闘の大勢は決し、PC達の勝利となる。(図 9 決着)

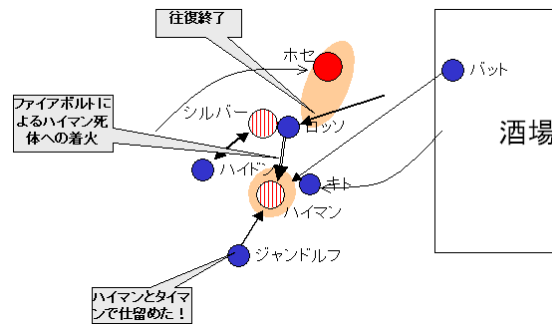


図 9 決着

その後ホセが残っているためしばらく戦闘は続くが、ホセも最後にはロツソの渾身の『ファイアボルト』によって落ちる(ロツソ「往復の意味ないやん・・・」)

第8章 みんなバカばかりだ！

結局正体もわかりようがない(ミンチ、焼け焦げ)まま、ハイマン達を倒したPC一行。セージ技能によって判別を試みるが、これもどうしようもない。入手できたものと言えば魔晶石³⁶くらいであった。

一晩休んだ(満身創痍者が多いので)後、ストーンサークルなどを調査する一行であるが、これでも有力な手がかりを発見できなかった。

残るのはトマスから入手した謎のプレートであるが、東の都市で調査を行う。

ロツソ「じゃあまずはシーフギルド³⁷で聞こう」
 マスター「魔法がかかっているなら俺らにはお手上げだな」
 ロツソ「キット、パス！」
 キット「よし。じゃあ魔術師ギルドへ行ってみよう」
 ロツソ「金銭的価値もわからないのか？」
 マスター「まあ、魔法がかかっているからなあ・・・ゴニゴニヨ」
 ロツソ「シーフズギルドはバカの集まりか?(笑)」
 ハイドン「まあまあ」
 キット「じゃあ魔術師ギルドで聞いてみました」
 マスター「鑑定不能、何だかわからない」

³⁶ 魔法力を溜め込んでおける石。まあ、ようはMP電池。

³⁷ ソードワールドでは各職業においてギルド(組合)なるものが存在するとしている。組合としての情報提供の他にレベルが上がった時は実際にはこれらのギルドにて魔法・技術の訓練を行うとしていきなりレベルがあがって魔法が増えるなどという矛盾を解決している。余談だが、冒険者ギルドも存在しており、依頼の斡旋を主にしている。フォーチュンクエストの冒険者ギルドはいい描写だったなあ・・・

ロツソ「…魔術師ギルドはバカの集まりか？(笑)」
キト「とりあえずとんでもないものだということがわかった」
ロツソ「じゃあ次はこのギルド(がバカの集まり)だ？」
B「セージギルド、セージギルド。聞いてみるよ」
マスター「うーん、何でしょうねえ、コレ？ちょっと、聞いたことない。」
キト「セージギルドは(略-(笑))」
ハイドン「よし、じゃあドワーフの鍛冶屋ギルドに行ってこの材質が何かを聞いてみよう」
マスター「うーん、金属なのかこれは…？金属のような感じだが、わからん。」
キト「ドワーフはバカの集まり…だな(笑)」
ロツソ「これだったら、チャ・ザの神殿は無理だね」
ハイドン「あ！ラーダ³⁸の神殿は！？」
マスター「神殿はない。ないからないんだよ！(半ギレ)」
ハイドン「ここまで調査してわからなかったから考古学研究会に持っていか」
ロツソ「この街はバカばかりだ！(笑)」
ハイドン「バカの街と呼ぼう(笑)」

かくして、謎のプレートだけを残して序幕は終了する。そして今後はこの謎のプレートを鍵として物語は展開するが、冒険者達は今はそれ(とか謎のプレートの正体とか)を知る術はないのであった……

続く

³⁸ ラーダは知識の神。故にその神殿はこのような謎の品物の鑑定については大いに期待できる機能を持つことが予想される。が、シーフギルド、魔術師ギルド、セージギルドと派手に全滅したのもし仮にラーダ神殿があったとしても状況が好転したかは甚だ疑わしい。

あとがき

ということでプレイから足掛け3ヶ月経ってやっとリプレイが完成しましたが、新シリーズ『サイランド・サガ 第1部 西ネイルの冒険者』をお届けします。確かに時間は経っていますが、世の中にはリプレイ書くのに3年かかる人もいますのでどっちもどっちってことで。

ソードワールドという日本最メジャーのTRPGを擁し、フォーセリアとは異なる別の大陸を舞台として展開する**驚天動地の冒険**！となりますが、第1部でマスターは引退です。あれま。以後(全4部)は私がマスターをやることになっちゃったよ、うへえ。

ちなみに、もう既に第3部まで終了し、毎回地形が変わるというポピュラス³⁹をやらかしているのでもまあ適当に期待しててください、あまり期待しすぎると失望すると思うので(´_ゝ`)ふーん くらいにしておけばいいと思います(弱気)。

今回はリプレイでもダイジェスト・リプレイという形式をとりました。これは「リプレイを書くのに3年かかってしまうのだから、もっと短期間でリプレイを作成できる手法を編み出した方がよくなって？」という発想を元に考えた形式です。純粋なリプレイ部分はあくまでも物語上の分岐となるポイントや特別笑った部分だけにとどめて、後は文章と図をメインとして作成するリプレイ形式……なんです結局3ヶ月かかっているわけだから試みは失敗となります。うむ。

難しいのはダイジェストにする部分とリプレイする部分の判断基準で、今回リプレイ部分に書かなかった所で面白かった部分は少なくないです。が、話の本筋とはズレているのでダイジェストに包含したということです。

まあもう少し考えながらリプレイを構成していけば方法論もまとまってくると思います。今後この形式で3部続くのは確定だし、生暖かく見守ってくれればと思います。

ちなみにキャラクターについて、今回私はPCロッソとして参加しました。キャラクターの個性がはっきり出せたので気に入っています。個人的にはライデンに続くヒットかもねこりゃ。しかし、次回からはマスター管理のNPCなので出番はグッと減ります。あーあ……

ただし、キーキャラクターとしてうまく配置して、PC達にその存在が忘れられないようにするための配慮は怠らないようにするつもり。実際次回に関してはほぼそれは達成できていると言えます。(どう達成しているかはお楽しみに)

では、「ロッソ」ではなくマスターとして次回『鷲と杉の木』でお会いしましょう。アディオス！

2006/08/23

³⁹ 神となり土地を上げたり下げたりして自分の民を発展させるゲーム。当時は画期的だったなあ。